

## 20世紀初頭における在米日本人学生ネットワーク形成の背景と意義

### The Construction of the Network among Japanese Student Clubs in the USA in the Early 20<sup>th</sup> Century

辻 直 人\*

#### 要旨

本稿では、20世紀初頭の在米日本人学生たちが各地で学生会を組織し、それが全米を網羅するネットワークへと発展していく背景、形成された意義について考察した。20世紀に入ると、アメリカの大学に在学中の日本人学生たちは、まず各所属大学で日本人学生会を組織していった。目的は、日本人学生同士の親睦であり、留学希望者への情報提供でもあった。しかし、同時期は西海岸で排日運動が激しさを増したため、各日本人学生会は国際的友好関係の構築も目指すようになった。だが更に、全米ネットワーク化はエキュメニカル運動にも同調して進展した実態も明らかになった。

**キーワード**：在米日本人学生会(Japanese Student Club)／排日運動(Japanese Exclusion Movement)／エキュメニカル運動(Ecumenical Movement)

#### はじめに

明治維新以降、日本人の留学傾向は官費のドイツ、私費のアメリカと二分されていた。特に文部省留学生の渡航先は「ドイツ主義」と呼ばれるほど全ての専攻分野においてドイツに留学する傾向が見られた。一方私費留学学生はアメリカを目指しており、後述するように、実数から言えば渡欧留学生数を遥かに凌駕していた。特に1900年頃の日本では、『成功』や『渡米』といった雑誌、『海外苦学案内』といった出版物を通じてアメリカでの苦学が広く紹介され、実際多くの若者がアメリカに夢を求めて海を渡った。

そのような日本国内での渡米留学熱の一方で、アメリカ国内では留学生たちが各地に日本人学生会を組織する動きが見られるようになった。これまでの日本人海外留学史において、20世紀初頭のアメリカ留学の実態についてはほとんど明らかにされてこなかった。これは、先にも述べたように近代日本における主たる留学先はドイツと考えら

れてきたからであり、アメリカ留学は移民や出稼ぎ労働者の「身分隠し」が多かったと見なされていたからである<sup>1</sup>。しかし、アメリカの大学に在籍した日本人は相当数存在し、現地領事館も把握していた<sup>2</sup>。

本稿では、20世紀初頭のアメリカで日本人留学生たちが各地で学生会を組織し、それが全米を網羅するネットワークへと発展していく背景とその経緯、形成された意義について考察する。この考察により、日本人アメリカ留学の知られてこなかった実態の一面、及び在外日本人の現地での学びをサポートするしくみが作られていった一端を明らかにしたい。

1つ問題点を指摘しておく。明治維新以降、実際アメリカに渡った日本人は相当いた。しかし、今回調査していく中で、日本人学生と分類されている学生の中に、ある時期からは日系人2世も含まれていったことが分かった。今回史料として用いた名簿や文書に登場する日本人名が、純粋に日本から留学した学生なのか、家族と共にアメリカに暮らしていた日系人なのかは残念ながら分からない。それが本稿の限界であり、事実をより鮮明にしていくことが今後の課題である。その点を含

\* TSUJI, Naoto  
北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科  
教育史、教育学概論

みつつ、以下の考察に入ることとする。

## 1. アメリカ留学の隆盛と暗転

近代日本における先駆的留学制度として1875(明治8)年に派遣が始まった文部省留学生の留学先は圧倒的にドイツであり、特に1880年代以降はどの学問分野でもドイツ一辺倒の傾向が強かった。しかし日本人の海外留学が始まった当初は、アメリカを志す者の方が多かった。文部省留学生も、第1回派遣者11名のうちアメリカに渡ったのは9名、そのうち7人はアメリカのみに滞在した。例えば後の外務大臣小村寿太郎はこの時ハーバード大学に留学している。その他にも法学専攻の三浦和夫、斎藤修一郎、菊池武夫、化学専攻の松井直吉、南部球吾、工学専攻の原口要らがアメリカ留学を果たした。この他に、伊沢修二、高峰秀夫、神津専三郎の3名も師範教育取調のためアメリカへ派遣されている<sup>3</sup>。このように、アメリカ留学が幕末から明治初期は主流だったのである。

しかし、ドイツ留学の傾向が強まるのにつれて、アメリカは官費留学生にとって、留学先として見向きもされなくなった。却ってアメリカを目指すようになったのは、私費で留学を試みた者たちである。『帝国統計年鑑』によれば、太平洋戦争以前で「修学」目的の海外渡航者が最も多かった1907(明治40)年3340人のうち、約95%がアメリカに渡っていた。同年の文部省留学生数は31人に過ぎない。つまり、3000人以上の者が官費派遣でない方法で留学を果たし、その主たる留学先はアメリカだった。

確かに、明治後半における渡米者の中には「修学」目的でも実は労働を主としている者も少なくなかったようである。しかし、特にアメリカ西海岸を中心に住み込みで働き、空いた時間に学校へ通う「スクール・ボーイ」と呼ばれる学生も相当数存在していた<sup>4</sup>。彼等が急増した背景には、日本国内の「海外苦学」ブームがある。就学率が高まった1900年代は、国内で収容しきれない進学希望者に対し、『成功』などの雑誌や単行本が、こぞって海外雄飛、海外苦学を提唱した。すなわち、アメリカは働きながら修学可能な国と、立身出世のルートとして華々しく紹介された。

ところが、こうした20世紀初頭の安易な留学

ブームを含む渡米者の急増が、アメリカ西海岸での排日運動の引き金となった。遂に1906年にはサンフランシスコで日本人学童を現地の一般公立学校から隔離し、東洋人学校に強制的に通学させるという、いわゆる「サンフランシスコ学童隔離事件」が起きた。日本政府はこの外交問題を解決するため、1907年に「日米紳士協約」によって日本人のアメリカ渡航を自主規制するなどの措置をとった。また日本政府は日本のイメージを改善するため、官民共同して1913年頃より「対米啓発運動(Campaign of Education)」を展開した<sup>5</sup>。同年には、カリフォルニア州議会で排日土地法(California Alien Land Law)が成立するなど、両国関係は予断を許さない状況にあった。このような両国関係が悪化する中で、1911年に高峰謙吉らはハーバード大学に日本講座(日本語、歴史、文学)の開設をするよう総領事に提案したり<sup>6</sup>、1913年にはスタンフォード大学に日本学講座を領事館や財界人の働きかけで開講し市橋俊を担当教員として赴任させたりもした<sup>7</sup>。

「紳士協定」による渡航規制以降は移民や出稼ぎの「隠れ蓑」としてのアメリカ留学生はいなくなり、純粋に学ぶ目的で渡米するようになった。しかし、排日運動が起きたカリフォルニアを中心に、20世紀初頭の在米日本人たちも日米の間で厳しい局面に立たされた。この時期にアメリカ各地の大学に在学する日本人留学生たちは、まずは自らの大学内や地域において日本人学生会(ないし日本人学生倶楽部)を組織し、その後は、大学間での連携を強めるようになった。そうした動きの1つの結節点が1916年に全米で刊行された英文雑誌*The Japanese Student*である。

そこでまずは、日本人学生会結成の様子について明らかにしていくこととする。

## 2. 在米各大学における日本人学生会の結成状況

筆者は2014年度までの4年間で北米七大学での日本人学生に関する史料調査を行った。七大学とは南カリフォルニア大学、スタンフォード大学、シカゴ大学、コロンビア大学、イェール大学、ハーバード大学、カリフォルニア大学バークレー校である。各大学での調査及びその他文献調査に依れば、最も古く結成されたのはカリフォルニア

大学に在学していた日本人学生たちの加州大学日本人学生倶楽部であった。この団体は1892年頃から活動開始の胎動が見られ、実際の活動開始は1897年からである。

その次に結成されたのは、1898年設立のハーバード大学日本人会である。その後は、1901年コロンビア大学日本人学生倶楽部、1903年スタンフォード大学日本人学生会、1904年シカゴ大学日本人倶楽部、1908年エール大学日本人会と続く。1907年に結成されたポリテクニク高校（ロサンゼルス）の日本人会と1911年に組織された南カリ

フォルニア大学の日本人学生会は合併して1912年に羅府日本人学生会となった。更に1912年には、カナダのブリティッシュコロンビアとミシガン大学でも日本人学生会が結成されている。また、創立時期は分からないが、イリノイ大学、コロラド大学、オーバーリン大学などでも同種の団体が結成されていた。このように、20世紀初頭に続々と各大学で日本人学生会が結成されている。

雑誌*The Japanese Student*創刊号（1916年）の巻末に、日本人学生団体（全21団体）の一覧が載っている。その各団体名は以下の通りである。

表1 1916年時点の全米日本人学生会一覧

番号	団体名	都市名
1	College of Pacific, Japanese Student Club	San Jose, Cal.
2	Colorado Japanese Student Association	Denver
3	Columbia University, Japanese Student Association	New York City
4	Harvard University, Japan Club	Cambridge, Mass
5	Japanese Association of American College Graduates	San Francisco, Cal.
6	Japanese Student Christian Association of Southern California	Los Angeles
7	Japanese Student Christian Association of Bay Cities	Berkeley, Cal.
8	Los Angeles Japanese Student Association	Los Angeles
9	Middle West Japanese Student Association of North America	Chicago
10	New York University Japanese Student Association	New York
11	San Francisco High School Student Association	San Francisco
12	Seiyu Kwai	Seattle, Wash.
13	Stanford University Japanese Student Association	Stanford
14	University of California Japanese Student Club	Berkeley, Cal.
15	University of Chicago Japanese Club	Chicago
16	University of Illinois Japanese Student Association	Champaign, Illinois
17	University of Michigan Japanese Student Association	Ann Arbor, Mich.
18	University of Utah Japanese Student Association	Salt Lake City
19	University of Washington Japanese Club	Seattle, Wash.
20	Vancouver Japanese Student Association	Vancouver, B.C.
21	Yale University Japanese Student Club	New Haven, Conn.

出典： *The Japanese Student*, Vol. I, No.1 巻末リストより作成

この一覧表からは、1916年の時点で個々の大学における日本人大学生の団体が12団体、高校在学生の団体が1つ存在していたことが確認できる（表1中11番）。つまり、高校にも団体を組織できるほどの日本人学生が在籍していたということである。また、特定の大学に限らずに地域における日本人学生会組織として5つあり（2, 8, 9,

12, 20番）、他に日本人キリスト者団体が2つ（6, 7番）、大学卒業生向け団体が1つ（5番）と存在していた。

1916年時点で日本人学生会が組織された計12大学を地域別に分類すると、東部地区にはコロンビア、ニューヨーク、ハーバード、イエールの4校。中部地区にはシカゴ、イリノイ、ミシガン、

ユタの4校。西部地区にはワシントンとカリフォルニア州3校で計4校と、均等に3地域に4大学ずつ組織されていたことが分かる。日本人が多く在籍していた大学はカリフォルニア、ミシガン湖周辺と東部アイビーリーグ所属の大学と3地域に分かれていた。

大学以外の日本人会も含めた表1の21団体を改めて地域別に分類すると、東部地区では大学以外に日本人学生会の名前は見受けられない。一方、中部地区にはコロラド日本人学生会が別に存在していた。西部地区には、サンフランシスコ高校日本人学生会の他、ロサンゼルスとパークレーを拠点にしたキリスト者団体2つ、サンフランシスコを拠点に在米大学卒業者の会があった。

更に西部地区にはロサンゼルス日本人学生会、シアトルSeiyu Kwaiも含めて、6つの日本人会が活動していた。つまり、21団体を地域別に分類すれば、東部地区が大学の4団体のみであるのに対し、中部地区は計6つ、西部地区は計11団体も存在した。21団体中11団体が北アメリカ大陸西海岸に集中していたことになる。日本人会の組織は西部地区が中心だったと言える。

次に、加州大学日本人学生倶楽部を中心に、各団体の活動の様子と目的を明らかにしていきたい。

### 3. 加州大学日本人学生倶楽部の結成と活動

現在計10校あるカリフォルニア大学のうち、最も古いパークレー校は1868年に設立された。以下本稿でカリフォルニア大学（加州大学）と呼んでいるのは全てパークレー校のことである。

#### (1) 在学生の様子

カリフォルニア大学に集まっていた最初期の日本人学生の特徴を紹介した史料によれば、「加州大学の日本人学生の多くは自給自営の苦学生にして、学費を本国に仰ぐ如き者殆んど稀な」状態だった<sup>8</sup>。彼らは時に病気になって仕事を失い、宿泊場所も失って学費も続かず、退学や休学を余儀なくされる者も少なくなかったと言う。このような状況をどうにかできないかと「遂に学生相集って異口同音に其善後策を講ずるに到」ったことが、加州大学日本人学生倶楽部を作る発端の動

きであった。

「加州大学に於ける日本人学生々活」<sup>9</sup>という記録によれば、同大学生は、「(一) 学費を父兄より得て勉強しつゝある大学生の生活、(二) 自ら学費を貯蓄して後入学せる大学生の生活、(三) 自ら学費を得ながら勉強しつゝある苦学生の生活」の3種類に分けられる。第一のタイプは学費を家族より支給されて東京での学生生活と何変わることもない生活をしている学生であるが、「此の如き無事安穩なる生活は加州大学にある日本人学生間にあっては稀れに見る者」だった。第二のタイプ「自ら学費を貯蓄して後入学せる大学生」も「斯の如き人は是れ亦た稀れ」であった。

最も多いのが第三のタイプである。すなわち、「自ら学費を得ながら勉強しつゝある苦学生」であり、「過去幾多の辛酸を経て奮進し来れる大学生…加州大学日本人学生間に在りて若し誇るに足るべき者を求めば恐らくは此の如き大学生の多きことこれなり」というのがカリフォルニア大学の日本人学生の実情であった。「日本人大学生の生活は一言にして云へば苦痛の生活なり、赤貧洗ふが如き生活なり」とも述べられており、実に困窮した学生が大半であった。

大学の午前中の授業は朝8時から11時までである。苦学生たちは「朝は六時に起き朝食を料理して七時半大学に行く支度を為し、「十一時より再び働ける家に帰りて朝飯の器皿を洗」う。「午後一時再び大学に行き四時或は五時甚だしきは六時に漸く課業を終へ、それより家に帰りて再び夕食の用意を為し凡ての仕事を終へる頃は午後八時」になる。それ以降ようやく自由の身となった学生は、自室で予習をし、大体11時から12時頃に就寝する。家事労働の合間に大学に通っているような生活を送っていたのが実情だった。

#### (2) 倶楽部発足の経緯と活動の様子

多くの苦学生が集まるカリフォルニア大学において、互助団体の形成が模索されるようになる。1892年頃から、「加州大学卒業生工学士曲尾辰次郎君が在学中同胞学生間に一つの集会所若しくは物置所として一小家屋を借り入るゝの必要を唱導せられ、当時大学生及高等学校生徒を勧誘して相談をなした」<sup>10</sup>のだが、「当時未だ其機運に達せざ

りしと見え、一先ず立消えとな」った。しかしその後1897年になって、卒業生の久野芳三郎が同大学の講師に就任したことを契機に、大学の一室を借りて毎週土曜、日本人学生の集会を始めた。これが、最初の加州大学日本人学生倶楽部の第一歩となった。

当初は大学の一室を利用しての活動は気兼ねするというので、活動も徐々に停滞していったが、やがて大学近くで複数の日本人が下宿している家屋を「先づ各自の荷物留置所兼宿泊所として(中略)借入ること」となり、大半の日本人学生がその便利さゆえに集まるようになった。こうしてキャンパス近くにアパートや空き家を利用して、Japanese Student Club Houseと呼ぶ集会所が常設されることになった。その後クラブハウスは少なくとも2度の引越しをしている(1901年Henry Street、1908年Virginia Avenue、1918年Euclid Avenue)。1918年より利用していたクラブハウスには26人も泊まれたというから<sup>11</sup>、相当な広さがあったことが分かる。

### (3) 学生倶楽部を支えた人々

#### ①卒業生

1887年、最初の日本人カリフォルニア大学卒業生以来1916年までに、68名の日本人が同大学を卒業した<sup>12</sup>。その後も、1925年には106人<sup>13</sup>、1927年は91人<sup>14</sup>、1928年に102人<sup>15</sup>と、日本人学生は増えていった。正に、加州大学日本人学生倶楽部は、こうした現役学生のための団体であった。

ただし、1916年時点での卒業後の居場所については、日本に戻ったのは68名中24名に留まり、アメリカに留まっている者は31名であった。特に1910年以降は卒業生がアメリカに留まる傾向が高まっており、卒業生37名のうち28名がアメリカに残っている。更に1915年以降になると、カナダにいる1名を除いて全員(計13名)がアメリカにそのまま留まっていた。何故卒業生の多くはアメリカに留まるようになったのか。その要因を明らかにするには、卒業生の履歴を丁寧に分析する必要がある。一つ考えられる理由として、二世が徐々に増えていたことが挙げられる。あるいは、他にアメリカの大学を卒業した後は日本に帰るよりもアメリカで働く方を選ぶ要因があったとも考えら

れなくはない。しかし、二世世代が増えている傾向は次の史料からも指摘できる。

1932年に加州大学日本人学生倶楽部が発行していた*Campanile Review*という英文の印刷物には、各学科や学年の紹介文、学生たちのエッセイなどが主に掲載されている。同誌Vol.1, No.2(1932年12月号)によれば、日本人学生173人中154人がアメリカ市民権を得ていて、日本生まれは僅か19名に過ぎなかった。つまり徐々に加州大学日本人学生倶楽部は二世が主流となり、団体の性格が変わっていたと考えられる。

#### ②会員

「加州大学日本人学生倶楽部規約」<sup>16</sup>前文には、「本会は加州大学に関係あるものを以て組織し相互の親睦と便利を計るを以て目的とす」と記されてある。つまり同倶楽部は在學生(普通会員)だけでなく、外部からその活動を支える支援者で構成されていた。卒業生や趣旨に賛同する者は特別会員に、倶楽部に対して功績のあった人物は名誉会員にそれぞれなることができた。そして在籍学生からは1か月50セント、在學生ではないが倶楽部の趣旨に賛同する者からは特別会員として1ドルを会費として徴収していた(規約第三章)。

1907年時点で、加州大学日本人倶楽部は幹事津彦一(1912年度卒)を筆頭に計6人の倶楽部役員と61名の特別会員、2名の名誉会員によって支えられていた<sup>17</sup>。名誉会員に名を連ねていたのは、前サンフランシスコ領事の上野季三郎と、前横浜正金銀行サンフランシスコ支店長の戸澤鼎であった。

1917年の時点では加州大学日本人学生倶楽部正会員として登録している学生は52名おり、特別会員は66名いた。名誉会員は引き続き前サンフランシスコ領事の上野季三郎の他、戸澤に代わって同じく前横浜正金銀行サンフランシスコ支店長の藤平順三の2名が就任していた。特別会員には桑港日本病院長(黒沢格三郎)、日米新聞社長(安孫子久太郎)、三井物産サンフランシスコ支店長など地元の名士と呼べる名前が並んでいる。こうした財政支援のおかげで、上述のクラブハウスの借り入れも可能になっていたのである。

#### (4) 主な活動とその目的

加州大学日本人倶楽部の主な活動として、在学生のための集会開催の他に、定期刊行物の発行、外部民衆のための講演会開催、他大学との交流が挙げられる。

##### ①定期刊行物の発行

1907(明治40)年8月から、加州大学日本人学生倶楽部は『麦嶺学窓(*The Berkeley Lyceum*)』という定期刊行物を発行している。同書は管見する限りで1917年11月までの10年にわたり、ほぼ年1回発行のペースで発行され続けていて、1917年11月に発行されたのが第八巻になる。『麦嶺学窓』発刊の理由は、創刊号の「発刊の旨趣」には「米国大学及学生々活の紹介」と記されている。すなわち、アメリカの大学事情をよく知らないで入学し、志半ばで挫折する例が少なからずあったので、アメリカの大学の「真体を闡明する」(真の姿を鮮明にする)ことを目的として刊行されたのであった。つまり、この刊行物は日本人留学生のため、特に今後アメリカの大学への入学を希望している人のために発行されたことになる<sup>18</sup>。実際この雑誌はアメリカ各大学での教育の様子、特にカリフォルニア大学の特徴、入学手続き、夏期講習会、スポーツなど学生の課外活動などが多くの紙幅を割いて紹介されている。

1908年8月に発行された『麦嶺学窓』第2号でも、カリフォルニア大学だけでなく、ハーバード、エール、コロンビア、シカゴ、スタンフォードといった他大学の様子について詳しく紹介している。第2号の「発刊の旨趣」ではこの点について、「一に独逸大学ありて米国大学あるを知らざるの観あり、是豈学界の為めに悲むべき現象」と記されており、アメリカ諸大学がドイツの大学と比べて日本に紹介されていない状況を打破したいという願いがあったことが分かる。つまり、この雑誌の対象者は日本人でこれから海外留学を考えている人であり、彼等へのアメリカ大学事情紹介が目的であった。そういう意味では、この雑誌は日本国内で発行されていた『独立時給北米遊学案内』(1903年刊)『海外苦学案内』(1904年刊)『米國苦学実記』(1911年刊)といった刊行物、『渡米』『渡米雑誌』などといった雑誌と同じ趣旨を

持っていた。

ところが、1908年発行の第2号「発刊の旨趣」には、創刊号にはない刊行目的が強調されている。つまり「進んで米人と日本人との間に立ち、相互意思の疎通を計るは其義務」である点を明記しているのである。この義務を果たすために日本語だけでなく英文欄を設け、日米両国からの寄稿文を掲載することにしたと言う。実は英文欄自体は創刊号にもあったが、第2号で取ってこの日米交流の意義を強調した形になっている点は注目に値する。英文欄にはカリフォルニア大学東洋言語文学教授ジョン・フライヤー(John Fryer)や、排日運動撲滅にも積極的だった医療宣教師アーネスト・A・ストージ(Earnest Adolphus Sturge)らが日米親善の意義を説いた論考を寄稿している。このように、単に日本人同士だけで親睦を深めていたわけではなく、アメリカ人や他の国からの留学生との交流にも目が向くようになっていた。

##### ②講演会開催、啓発運動への協力

第2号の「発刊の旨趣」で強調されたように、日米親善交流事業は学生倶楽部の活動になっていった。当時カリフォルニアにおいて激化していった排外的傾向に対して、カリフォルニア大学に在学していた日本人学生も憂慮しており、両国関係の改善を期待した講演会を実施している。

1917年の段階でカリフォルニア大学にはYu Ai Kwaiと呼ばれる団体が存在していた。この団体の詳細は不明で、加州大学日本人学生倶楽部との関係もよく分からない。しかし、同大学に在学する日本人学生がこの団体に関与していることは確かであり、両団体の間には何等かの関係があったと考えられる。そのYu Ai Kwaiが1917年2月から3月にかけて、アメリカ人の聴衆を対象にした5つの講演会を企画実施している<sup>19</sup>。講師には太平洋通信の笠井重治、スタンフォード大学教授市橋倭、宗教史・哲学研究者のH・ガイ(Harvey Hugo Guy)、スタンフォード大学学長のD・ジョーダン(David Starr Jordan)、パシフィック大学のシュワルツ(Henry B. Schwartz)が呼ばれ、それぞれ「日本の過去と現在」(笠井)、「日本思想の進化」(市橋)、「日米関係」(ガイ)、

「日本と新国際主義」(ジョーダン)、「日本人の生活におけるキリスト教の影響」(シュワルツ)という題で講演をしている。こうした動きは、日本政府が主導で画策されていた対米啓発運動への協力と捉えられる。市橋俊が啓発運動の一環としてスタンフォード大学に着任した際の学長がジョーダンであった。また、笠井重治の勤めている太平洋通信も啓発運動の一環として日本の情報をアメリカに発信するため作られた通信社である。つまり、日本人学生たちも対米啓発運動に関与していたと言える。

日本人学生の身にもアメリカ人から受ける差別は切実な問題であり、1924年の時点でも依然として、緊迫した雰囲気があった。日本人学生倶楽部のクラブハウスを拡張しようとしていたが、地域から反対運動が起こり、工事を断念しなければならない状況に陥っていた<sup>20</sup>。彼等自身も、地元住民からアジア人としての差別を受けていたのである。そうした人種差別が長く社会にくすぶっていた状況に日本人学生たちも直面しなければならなくなったからこそ、こうした啓発運動への協力にも積極的になったのだろう。

### ③他大学との交流

学内の日本人学生同士の親睦を目的として始まった同団体は、その後カリフォルニア州内の他大学在籍日本人学生との親睦を深めるようになっていった。ただし、このような動きは時期的には学生倶楽部の活動が始まってだいぶ経ってから見られるようになる。このような大学間交流の動きは、次節で検討する全米日本人学生ネットワーク形成の動きとも関連していると考えられる。1917年には在カリフォルニア日本人アマチュアアスリート組合(The Japanese Amateur Athletic Union of California)をカリフォルニア大学、スタンフォード大学、サンフランシスコ高等学校の3校の在学日本人で組織している<sup>21</sup>。また、それ以前にもカリフォルニア大学とサンフランシスコ高等学校の日本人学生同士でテニスの試合も行われていた<sup>22</sup>。

*Campanile Review*の1935年秋号巻頭言では、同誌発行の目的はカリフォルニア大学各キャンパス間の意見交換と日本人学生の一体感の形成とし

ているが、このような一キャンパスを越えたキャンパス同士の交流というアイデアをスタンフォード大学や南カリフォルニア大学の学生会から得たと謝辞が附されている。カリフォルニア大学とスタンフォード大学、南カリフォルニア大学間の交流も進み、1937年春号には両大学日本人学生会の紹介も掲載されている。

このように、年を経るにつれ、大学内での交流親睦範囲が地域や所属教育機関を越えて広がっていった。

### 4. その他の大学における日本人学生会の活動

ハーバード大学における現役日本人学生のためのハーバード日本人倶楽部(Japan Club of Harvard)は、1898年結成後一旦活動を中止するが1907年に再結成された<sup>23</sup>。活動内容としては年一回の総会の他、適宜理事会が集会を開催していた。倶楽部の目的は「日本人学生の関心と互いの親睦を促すこと」であった。

コロンビア大学日本人倶楽部(Japan Club of Columbia University)は1901年秋に結成されている。結成の目的は、大学に在学する日本人学生同士の社交の場を作ることであった<sup>24</sup>。

エール大学には、朝河貫一が世話人を務めたエール大学日本人会が組織されていた。同会は遅くとも1908年2月には会則が制定され、本格的な活動を始めている。『エール大学日本人会エール大学日本学生名簿』によれば、エール大学留学生のうち、最初期の留学生は同志社、早稲田大学(東京専門学校)、慶應義塾といった私学出身者だった。一方官立大学からは、ほとんどが1913年以降に集中している。つまり、官費留学生たちのアメリカにおける受け皿的役割を日本人学生会が担っていたと考えられる。

南カリフォルニア大学でも南加大学日本人学生会が1911年9月に結成され、1912年より雑誌『南加学窓』を創刊するなど活動を活発にしていた。なお同大学には1915年度において、当時全米最多の56名の日本人留学生在籍していた<sup>25</sup>。のち、同学生会はロサンゼルス近郊の高等学校在籍者も含んだ「羅府日本人学生会」へと拡大していった。

日本人会結成の理由について、『南加学窓』は

以下のように紹介している。

当時ローサンゼルス及びポリテクニクハイスクール新入生は各学期十四五名も在たのであるが、此等の学生の多数は二三月後に退学し、残余の輩も大抵は一年内外にして飛出し、僅々二三名の瘦影を止むるのみであった。此有様は毎年々々何時まで繰り返されるのか知れなかったが、幸ひにも同胞学生の先輩は茲に憂ふ処あって、千九百〇七年の新学期にポリテクニクハイスクール日本人学生会なるものを設立し、専ら新入学生に便宜を与ふると共に、旧在在生を励ました結果同胞学生の状態は茲に一変したのである<sup>26</sup>。

つまり1907年以前は高等学校に入学してもすぐ退学する者が多数であったが、この状態を憂いた学生たちが日本人学生会を結成したことで、状況が一変したと述べているのである。すなわち、1907年時点でポリテクニク高等学校日本人学生会に所属した10名の日本人学生のうち9名が卒業に至ることができ、以降退学する者は少数になった。日本人同士で集まり励まし合うことで、勉学にも集中することができ、学校生活が充実してきたということであろう。

以上、20世紀初頭に結成された各日本人学生会の結成理由を見てみると、いずれも在学している日本人学生の勉学の便宜を図る目的で、日本人同士の交流が画策されていたことが分かる。同胞の者同士が親睦を深めることで早く環境にも慣れ、勉学を続けられるような配慮があったことが確認できた。

## 5. *The Japanese Student*の発行

### (1) 雑誌・名簿発行の実態

本節では、全米に拡大していく在米日本人学生の連携の意義について検討することにする。

1916年より英文雑誌*The Japanese Student*が刊行され始めた。当初は隔月刊行だったが1918年10月(Vol.Ⅲ, No.1)より月刊となり、1919年5月号まで発行され続けた。同誌は外国学生友好関係委員会(Committee on Friendly Relations among Foreign Students)協力のもと刊行され

ていた。編集室はシカゴ大学エリスホールに設けられ、加藤勝治が編集長を務めた。加藤はシカゴ大学で1914(大正3)年に医学博士(Ph.D.)を取得した人物で、1913年より「米国国際親善委員日本人学生部幹事」の役割を担った<sup>27</sup>。前述した『エール大学日本学生名簿』にも1915年にエール訪問者欄に加藤の名前が記されている。加藤は全米各地の日本人会と接触し、横のつながりを形成する働きかけを進めていたと考えられる。

また、この雑誌創刊と同時期に、1915年度の日本人学生名簿が発行されている(Kato Katsuji, *Japanese Students In North America 1915-1916, Committee on Friendly Relations Among Foreign Students*, NY)。管見の限り、これが最も古い在米日本人留学生を網羅した名簿である。雑誌*The Japanese Student*同様、名簿*Japanese Students In North America 1915-1916*も加藤勝治が編集を担当している点、また同種の名簿は1916年度以降*The Japanese Student*の中で定期的に掲載されていることから、1915年度の名簿は雑誌創刊号を編集するための基礎資料として作成されたと考えられる。というのも、名簿の前文にも既に雑誌*The Japanese Student*が紹介されており、雑誌発行が先にあったことが確認できる。委員会としてはこの雑誌を通して留学生間の一体感(consciousness of unity)が進展することを望んでおり、名簿も留学生同士の横のつながりを作る目的が期待されていたのであった。同名簿によれば、1915年度時点で全米に637名の日本人学生が在籍していた。

なお、雑誌*The Japanese Student*は、1919年11月以降は*The Japan Review*という名称になって1922年1,2月号まで発行され、名簿は*The Directory of Japanese Students in North America*という表題で、遅くとも1925年より名簿が発行されている。

### (2) 編集スタッフ及び発行協力者について

*The Japanese Student*の編集スタッフについてであるが、編集長加藤勝治の他に、賀川豊彦や小崎道雄(小崎弘道の長男、日本組合教会牧師オパーリン大学、コロンビア大学、エール大学で神学を学んだ)、笹森順造(1901年弘前教会で受洗、

1912年渡米しデンバー大学大学院留学、南加州日本人会書記長、帰国後は東奥義塾塾長や青山学院院長、戦後は片山内閣で国務大臣など務めた)の他、Motoshige Oseko (Auburn Theological Seminaryに1918年在学)、Ren Hirao、Hidejiro Okuda、柳原貞次郎が名を連ねていた。柳原は1910年に京都帝国大学を卒業した後大阪三一神学校へ入学、1915年6月からボストン近郊のケンブリッジ神学校へ留学し、1917年8月に卒業後は大阪聖ヨハネ教会司祭となった人物である。つまり、編集部のうち少なくとも4人がキリスト教関係者ということになる。

上述の通り、同雑誌の発行は外国学生友好関係委員会に支援されていた。この団体理事の中にジョン・R・モット (John R. Mott) の名前がある。モットは世界的エキュメニカル (教会一致) 運動、学生キリスト教運動 (SCM) の世界的指導者でもあり、北米YMCA同盟総主事を1915年から務めていた。日本にもたびたび来日し、キリスト教学校や教会の横断的協力体制構築に助言をしていた。委員長はクリーブランド・H・ドッジで、1917年にC・H・ドッジ財団を設立、大戦で得た多額の利益を今度は「人類の発展」のために使ってもらう目的で、医療や保健分野を除く文化的慈善的事業への支援を行った。ドッジ自身は長老派教会員で、支援先の1つがYMCAであった。つまり、こちらもキリスト教色がとても強い団体であった。この委員会の主たる目的は、学生たちのキリスト教的性格の発達を促し、奉仕の精神及び国際的な善意の心を刺激しながら、全ての国籍の学生たちの間に真の友好関係を築くことであった<sup>28</sup>。モットらは世界的な学生の連携を目指していたのであり、在米日本人留学生の支援もこうした彼らの運動の一環と見なしていたと考えられる。

### (3) 雑誌発行の目的

*The Japanese Student*が創刊された目的について、創刊号社説は以下のように説明している。

新島襄が1870年にアマースト大学を卒業した頃、日下部太郎はラトガース大学卒業間際で無念の死を遂げた。それ以来アメリカで学ぶ日本人学生は数千を数えるに至った。しかし、彼らの業績

を記録として残す組織的な試みがなされてこなかったことは大変遺憾である。そこで、断片的ではあっても過去の留学生たちの記録を残すために、それらのデータを収集することが創刊の第一の目的であった。

第二の目的は、日米の知的交流に関する正確な情報を広めて、アメリカでの排日運動解決に貢献したいというものであった。当時展開されていた「対米啓発運動」へ心からの共感と協力したい気持ちを持っているが、残念ながら一連の運動は余り具体的に展開されていない。過去の交流をもっと学ぶことで、あらゆる知的分野で両国の信頼関係を深めることができる。在米日本人学生は、存在自体は小さいが、科学分野や日常生活における彼らの活躍により、日米の発展と両国の交流に貢献できる、と述べている。すなわち、学生交流を通して日米関係改善に貢献したいという意図が込められていた。

第三の目的は、日本人学生の人生哲学において霊的で理想的な態度を創造することである。アメリカは物質的な社会となりつつあり、霊的な雰囲気 (spiritual atmosphere) が陰に隠れつつある。教会でさえもその影響が見られる。それでも、アメリカ文明は物質的要素だけで作られているのではない。アメリカで学ぶ以上はその根底にある精神を見つめる努力をしなければならない、と社説筆者は述べている。ここにキリスト教伝道の目的が込められていたことが見出される。前述の名簿でも「ディスカッション・グループによってキリスト教の基本を学ぶ体制を国中に組織することが私たちの最も重要な仕事の1つである」<sup>29</sup>と述べていることから、実はこの留学生ネットワーク形成の根幹にはキリスト教伝道の目的があった。

その他にも、日本人学生の代弁者たること、日本人学生にとってより有益な情報を提供すること、日本人学生・卒業生とアメリカ人の関係諸団体が交流する場となることなどを目的に掲げていた。

1916年の時点で、アメリカの大学には50カ国から5000人以上の外国人が既に在籍していた。こうした留学生の交流を外国学生友好委員会は目的としていた。日本だけでなく、中国学生キリスト者

や朝鮮学生、インドキリスト者学生が既に雑誌を発行しており、ラテンアメリカ出身者のためのスペイン語の雑誌も準備中だという<sup>30</sup>。こうした動きは、単にキリスト教活動の一環として捉えるだけでなく、当時のアメリカ外交政策との関係も考慮すべきだが、この点に関して明らかにする史料は今のところない。

#### (4) 掲載記事の特徴

掲載記事の種類は大きく分けて社説、署名記事、各地からの動向報告・通信、図書紹介である。

初期の頃は、日本人留学生の記録や留学生たちの現状を伝えた内容が多い。福井藩お雇い教師をしていたW・E・グリフィスが創刊号に、幕末から明治初期にかけてアメリカ留学を果たした日本人について寄稿している。その後も、日本人女学生や幕末留学生の歴史がたびたび紹介されていた。その後、Vol. I, No.3に掲載されたニューヨーク学生会の紹介を皮切りに、各地の学生会現状報告が毎号掲載されるようになり、横断的な日本人学生会の交流が図られるようになっていった。

創刊号には、ハーレー (Chas. D. Hurrey) の“International Friendship among Future Leaders”という、将来を担う若者たちにとって国際的友好関係を築くことの大切さを訴えた署名記事も掲載されている。これ以降も、日米関係を危惧して両国間の友好について考えた記事が定期的に載せられた。編集部からの求めで、シカゴ・デイリー・ニュース東京特別特派員のE・W・クレメント (Ernest W. Clement) は、日米相互の友好を構築するための在米日本人学生へアドバイスを寄稿している (1917年12月、Vol. II, No.2, p.55)。同記事でクレメントは、二国間で生じるトラブルは大抵の場合、相手の観点への誤解が原因と指摘し、在米日本人学生にとって両国の観点を理解し、説明するのは容易なことであるから、両国間の誤解解消に努めてほしいと綴っている。このように、日米友好関係改善を論じた記事が多く寄稿されるようになっていく。

また、次項で述べるような外国人学生の集会報告も定期的に載せられるようになった。

#### (5) 学生集会の企画運営

外国学生友好委員会は日米の学生同士で友好関係を築けるように、夏と冬に集会を企画運営しており、その後援をYMCAが担っていた。1915年ワシントン州シーベック (Seabeck) などで開かれた集会には52人の日本人留学生が招待され、各国の留学生と友好的な交流の機会を持った<sup>31</sup>。ここでは、聖書や北アメリカについて学ぶ機会の他、学生同士で話し合う機会などが設定されていた<sup>32</sup>。こうした夏季集会は毎年開かれ、1918年6月の場合、マサチューセッツ州ノースフィールド (Northfield) で開かれた集会にはアルゼンチン、アルメニア、ブラジル、チリ、中国、キューバ、インド、イタリア、日本、メキシコ、ペルー、フィリピン、ロシア、エルサルバドル、南アフリカ、シリアより115名の外国人学生が参加し、うち日本人は43名だった。同時期にウィスコンシン州レイク・ジェノバでも学生集会が開かれており、日本人学生33名が参加したという記録もある<sup>33</sup>。

*The Japanese Student* June 1917 Vol. I, No.5 巻末に、以下のようなモットからのメッセージが掲載されている。

外国学生友好委員会に代わって、6月の北アメリカ学生集会へ日本人学生をゲストとして心を込めてお招きできることを、大いに喜んでいきます。国際的ストレスが大きいこの時代に、国を担う将来の有能なリーダーたちが、友好親善を促進するために集まることは極めて緊要なことです。これらの集会は、学生たちにとって日頃では経験できない社会的霊的な問題を考えるいい機会を提供することになるでしょう。

このような学生夏期集会の第1回は、1886年の7月7日から8月1日までの3週間にわたり、マサチューセッツ州のハーモン山において行われた。そもそもこの集会はYMCAの大学生幹事らによって発案され、全米の大学生キリスト者会に招待状が送られたのである。後にこの集会を運営する側になるモット自身も、当時21歳の学生としてこの最初の集会に参加していた。参加者は25州とカナダ、その他数カ国の代表者計250名で、その中にはウォーセスター・ポリテクニク大学

(Worcester Polytechnic Institute) からシモムラ・M・コタロウという日本人も参加していた。この時の夏期集会は「聖書を学ぶための大学生夏期集会 (The College Students' Summer School for Bible Study)」とも呼ばれていた<sup>34</sup>。

このように、学生の集会はキリスト教団体YMCAによって国際交流を促進するものであり、宗教的感化も大きな目的となっていた。

## 結論

20世紀に入ると、アメリカの大学で学んでいた日本人学生たちは、まずそれぞれの所属大学において日本人学生会を組織するようになった。結成の理由は、日本人学生同士の親睦であり、留学を希望する日本人への情報提供の意図もあったことが、加州大学日本人学生倶楽部の刊行物『麦嶺学窓』から分かる。また、学生の脱落者を減らす意図もあったことが羅府日本人学生会発行の『南加学窓』より分かった。

しかし、同時期はカリフォルニアを中心に排日運動が激しさを増す時期でもあり、各日本人学生会はその対応を迫られるようになった。実際加州大学日本人学生倶楽部はクラブハウス拡張を計画した際、排日的な現地の動向を理由に建設不許可とされ渡されている。こうした摩擦を解消するため、アメリカ人向けに日本への理解を促す講演会を開催したり、外国留学生との交流会を積極的に企画したりして、国際的友好関係の構築を目指すようになった。

*The Japanese Student*という雑誌発行によって、全米の日本人学生会ネットワークを組織する動きは、上記のような日本人学生が現地に溶け込むための親睦を促すと同時に、アメリカ人等との交流を盛んにして摩擦を解消しようとした動きが全国に拡大していった結果と考えられる。また、このようなネットワークの拡大と共に、大学間交流も盛んに行われるようになった。

しかし、全米ネットワーク化はそれだけが要因ではなかった。つまり、それはキリスト教伝道の一環として、すなわち世界的な教会合同運動（エキュメニカル運動）の1つとして、モットらが推進していた動きにも同調して進展した実態があった。キリスト教的コスモポリタニズムの立場か

ら、各国の留学生が集会に集い、世界平和友好関係を築いていきながら、キリスト教伝道を進めていく目的もあったのである。国境を越えた学生交流が、外交摩擦の解消とキリスト教的世界観確立の目的で進められていったことが明らかになった。

こうしたキリスト教的コスモポリタニズムの動きが、その後の在米日本人学生や日本人コミュニティにどれほどの影響力があったのかは、今後の考察課題としたい。

本研究は、科学研究費平成23年度～26年度基盤研究(C)「近代日本における民間を中心とした国際教育交流の拡大に関する調査研究」による調査研究成果の一部である。

<sup>1</sup> 「アメリカ官憲の目をくぐるために、移民という形式でなく留学生と称してやってくるものが増え始めた。移民周旋業者の入れ知恵によるものである。(中略) 移民業者の手で送られてくる“留学生”の大部分は労働者と少しも変わりはない(若槻泰雄『排日の歴史 アメリカにおける日本人移民』中公新書、1972年、28～29頁)

<sup>2</sup> 在ニューヨークの一等領事による「米国へ留学セントスル本邦人ノ子弟ニ対スル注意」(1899年5月10日付)という文書がある。これは、当時アメリカにいた日本人の実態に関する調査報告であり、今後渡米し留学しようとする日本人に対し、注意を喚起している。『海外留学生(各府県派遣及個人)関係雑件』(外務省外交史料館蔵)

<sup>3</sup> 渡辺實『近代日本海外留学史』上、講談社、1977年、362～363頁

<sup>4</sup> 加藤勝治「在米日本人学生問題」『開拓者』第9巻第9号(1914年9月)にも、海外苦学生の様子が克明に記録されている。

<sup>5</sup> 詳細は辻直人『近代日本海外留学の目的変容 文部省留学生の派遣実態について』東信堂、2010年、127～137頁を参照。

<sup>6</sup> 「ハーバード大学二日本講座新設一件(講座基金二関スル件)」、外務相外交史料館所蔵

<sup>7</sup> 市橋倭のスタンフォード大学着任も、対米啓発運動の一環だった。詳細は辻前掲書132頁を参照。

<sup>8</sup> 『麦嶺学窓』創刊号、1907(明治40)年8月、52頁

- <sup>9</sup> 『麦嶺学窓』創刊号、57～67頁 pp.27-28
- <sup>10</sup> 『麦嶺学窓』創刊号、52頁
- <sup>11</sup> *The Japanese Student*, Vol. II, No. 4, April 1918, p.173
- <sup>12</sup> 『麦嶺学窓』第八巻、1917年11月、113～115頁
- <sup>13</sup> *The Directory of Japanese Students in North America 1925-1926*, The Japanese Students' Christian Association in North America, p. 35
- <sup>14</sup> *The Directory of Japanese Students in North America and Hawaii 1927-1928*, p. 50
- <sup>15</sup> *The Directory of Japanese Students in North America and Hawaii 1928-1929*, p. 51
- <sup>16</sup> 『麦嶺学窓』創刊号、56頁
- <sup>17</sup> 『麦嶺学窓』創刊号、54～55頁
- <sup>18</sup> 同誌がどの程度の範囲に広まっていたのかは不明だが、国会図書館にも同誌の一部が所蔵されていることを鑑みれば、日本にも同誌が運ばれ講読されていたことが推測できる。
- <sup>19</sup> *The Japanese Student*, Vol. I, No.5, June 1917, p.204
- <sup>20</sup> “Protest Petition Against Construction of Japanese Student House (UC) 1924”, *City of Berkeley Records, 1878-1954*, University of Berkeley Archives
- <sup>21</sup> *The Japanese Student*, Vol. II, No. 2, December 1917, p. 71
- <sup>22</sup> *The Japanese Student*, Vol. I, No. 5, June 1917, p.204
- <sup>23</sup> *The Harvard University Register 1911-12*, p.145
- <sup>24</sup> 『三田評論』第331号、1925年3月
- <sup>25</sup> Kato Katsuji, *Japanese Students In North America 1915-1916*, Committee on Friendly Relations Among Foreign Students, NY
- <sup>26</sup> 酒井謙祐「日本人学生の状態に付て」『南加学窓』第1巻号、81頁
- <sup>27</sup> 『日本血液学会雑誌』（日本血液学会）第24巻第4号、1961年8月、418頁
- <sup>28</sup> Chas. D. Hurrey, “International Friendship Among Future Leaders”, *The Japanese Student*, Vol. I, No.1, October 1916, p. 4
- <sup>29</sup> Kato, *ibid.*, p. 2
- <sup>30</sup> Hurrey, *ibid.*, pp. 5 - 6
- <sup>31</sup> Kato, *ibid.*, p. 3
- <sup>32</sup> *The Japanese Student*, Vol. I, No.1, October 1916, pp.22-28
- <sup>33</sup> *The Japanese Student*, Vol. III, No.1, October 1918,
- <sup>34</sup> Chas. D. Hurrey, “The History and Significance of Student Summer Conferences”, *The Japanese Student*, June 1917, Vol. I No.5, pp.181-185